体験記（長崎被爆）

奥平博子
中野三丁目

(一)あの日のこと

昭和二〇年八月九日。長崎の空は青く、白い雲が浮かび、暑いけれど妙に乾いた感じの日だった。私は県立長崎高等女学校の一年、学校は夏休みで、家には母と妹もいた。

朝から発令されていた警戒警報も解除され、ほっとしていたその時、聞き覚えのあるあのB29の爆音が、突然頭上に聞こえ、はっとした瞬間だった。眼前で、カメラのフラッシュを焚かれたと思われる閃光が走り、体が飛ばされたように思った。何が起こったのか考えるゆとりもなく、とっさに庭に下り、縁の下に身を伏せた。この間、いままでに聞いたこともないような轟音が聞こえたように思う。私は、「我が家に直撃弾が落ちたのだ――もう、これで自分はおしまいだ――」と、朦朧とした意識の中で、そればかり考えていた。

母の声で、我にかえり、恐る恐る立ち上がって見ると、家の中は見るも無残な有様だった。大きな梁は落ち、畳は吹き飛ばされて折り重なり、建具は一枚として立っていない。ガラスは木っ端微塵で、爆風が吹いたと思われる方向から、反対側の壁や柱に鋭く突きささっていた。皆、何が起ったのか全く判らない。空は黒い雲がおおっているようだった。私たち母と妹との三人は、町内の横穴壕まで、やっとの思いでかけつけた。家は焼けなかったものの、住める状態ではない程壊れていた。その夜は近所の人共々壕に泊った。一同口数も少なく、ガラスで怪我をした人の手当をするのみ。夜半、壕から出て高台から見下ろした市街地は、大変な火事だった。県庁の庁舎の窓からは、焔がめらめらと上り、凄じい勢いで燃えていた。皆はいくらか落ち着きはじめたが、情報が全くない。不安なまま夜が明けた。

長崎医大付属病院の院長であった父は、その日の八月九日朝八時に、いつもの通り出勤して行った。私たち家族は門前で父を見送った。この時の後ろ姿が、私たちが見た最後の姿となってしまった。

いつまでたっても、はっきりとした情報が入って来ない。『長崎市内は全滅だ。生き残っている人も殆どいないだろう』など

と次第に流れて来る情報は、ただならぬ事態であることを思わせた。

長崎は、三方を山に囲まれた坂の街である。私たち家族は、大学病院のすぐ近くの家（坂本町）から、半年前に知人の紹介で山側の高平町に疎開のような形で引っ越したため、以前に住んでいた大学病院付近の事が気がかりでならなかった。その中に、医大辺りが被害が大きく、大変な様子だという情報が入った。父の安否は依然として判らない。焼け残った小学校が臨時の救護所になり、生存者でけがのひどい人は、そこに収容されているというのである。

そんな時、父に召集令状が来た。今から考えればめちゃくちゃな話である。母は意を決して、その赤紙を渡すべく父を探しに出かけて行った。妹と二人、心細さをこらえて一日中待っていた。しかし、歩き廻った母は探し出す事ができず、疲れ切って帰宅した。

その母の話すことには、街には立っている建物は皆無、髪の毛を逆立て、ぶら下がった皮膚の手を胸元に、ただ当て所なく歩いている人、力尽きて倒れ込む人、黒焦げ状態で倒れている人、馬の死骸等々、地獄絵さながらの様相だという事だった。翌日もまた、母は出かけて行ったが、再び空（むな）しく疲れ果てて帰宅した。

その深夜、大学の医学部の学生さんが、父の遺体が見つかったとの、悲しい知らせを持ってかけつけてくれた。ああ、やはり駄目だったか、一縷（いちる）の望みを持っていた私達だったが、打ちのめされる知らせだった。母は再びその学生さんと二人で夜道を出かけて行った。私は十二歳、妹は九歳、母としては、変わり果てた父の姿を見せたくないと思ったらしい。二人は家にいるようにと言い渡したのだった。

妹と二人、長い長い時間じっと耐えて待った。次の日の夕刻、母は父の遺骨を抱いて帰宅した。私は頭がぼーっとして、涙も出なかった。この三、四日のショックで、皆、確かに気が動転し、記憶も定かでなくなっていた。

父は、大学病院地下の図書室にいて、爆風によって落下した天井が頭に当り、即死だったということだった。母は父に別れの言葉をかけ、自分の手で荼毘（だび）に付したのだった。多くの人々が肉親を探し、このようにせざるを得ない状態だったのである。戦時中の非常時とはいえ、母の気持ちを思うと、どんなに辛い事だったろうと思う。本当に母は強かったと思う。

八月十五日、暑い日だった。音質の悪いラジオを囲み、はっきりは聞き取れなかったが、戦争に負けたことは理解できた。私は、子供心に、くやしさの余り、「くやしい、くやしい」と云って泣いてしまった。その二～三日後に、「アメリカ兵が上陸して来る。女、子供は市内から逃げるように」との通達が流れた。こんなひどい目に会った上、まだ逃れなければならないとは。

母は男装をし、父の遺骨を胸に、背負える限りの身のまわりの品を持ち、私達もリュックを背負い、深夜に出発した。

三人は黙々と暗い国道をひたすら歩いた。長崎駅は壊滅し、二駅先からしか列車はないという事であった。辛うじて辿り着いた駅は、逃れる人々で溢れていた。窓から乗り込んだ列車はすし詰め状態、走っては止まり、また走り、私たちの目ざす群馬県には何日かかるか見当もつかなかった。そこには祖母たちが東京から疎開していたのである。

㈡生き残った被爆者の悲しみと苦しみ

群馬県での生活は、慣れない土地である上、当時の物不足と、私たちが転がり込んで来た者だということもあり、肩身の狭い思いをした。悲しかったのは、あの惨事を切り抜けて来た母が、火を見ると父を荼毘に付した事を思い出すらしく、狂わんばかりに嘆く姿を見る事だった。そんな時の慰め役は十三歳の私だった。自殺をしようと思ったことが三回あったそうで、その度に私たち子供の事を思い、出来なかったとは、後から聞いた話である。

田舎の生活は二年八か月続いた。比較的恵まれた裕福な生活をしていた私たちは、父を失って、いわばどん底生活をするはめになったのであった。

少しずつ元気を取り戻した母は、このままではよくないと、思い切って三人で上京する事に決めたのだった。私は中学、高校と短期間に転校し、その都度数多くの辛い事があった。母は知人の世話で会社に就職し、私もアルバイトをしながら学校に通った。何といっても、私にとってこの時期一番悲しかったのは、父を失った事の淋しさであった。

母が仕事をしていたので、家事は妹と二人で行なった。進学など誰かに相談したい時、また、夜の団欒の時、ラジオを聞いて気を紛らわしていた。

昭和三一年の春、縁あって結婚した。話が決まるまでには、家族に種々の抵抗があったようだった。原爆という恐ろしいものに会って、果たして弊害がないものだろうか等々、懸念していたらしい。

幸い、子どもも生まれ、大過なく暮らす事ができたが、何かにつけて、父が生存しない辛さを思い知らされた。何も悪い事をしたわけでもないのにと、心から原爆を恨んだ。風邪などで体調を崩すと、原爆の影響では？と姑がよく言っていた。検診を受けに行く時にも、疑いの目を向けられたりした。

㈢今被爆者として訴えたいこと。

来年は、戦後五〇年である。父の三七回忌までは、原爆という文字を心して避けて来た。忘れてしまいたい、あんな辛いことを思い出したくないという気持ちからだった。

昭和五六年、三七年ぶりに、大学の慰霊祭に招かれて長崎に行った。本当に懐かしかった。

爆心地を歩き、原爆資料館を見学し、片足の鳥居、傾いたままの医大の石門、更に大学病院関係者の慰霊碑に詣り、心から犠牲になった方々の冥福をお祈りした。当時四二歳だつた父は、仕事のこと、家族のことなど、思い残す事が多々あったであろうと思うと、やりきれない気持ちだった。

ありとあらゆる苦難を乗り越えて来た母は、今年八二歳となった。この母、強かった母が頑張ったからこそ、現在の我々があり、幸せに過ごしていられるのである——と、感謝する日々である。

過日、父の五〇回忌法要を、内々で取り行った。若かりし日々の遺影を飾り、母を囲んで過ぎ去りし日の思い出を語った。一九四五（昭和二〇）年の十月には、東大教授として迎えられる事が決定していたその二ヶ月前に殉職。どんなにか残念だったろうと、一同で偲んだ。

「被爆者援護法」が提唱されて久しいが、未だに制定されない。世界で唯一の原爆犠牲者になぜ、弔慰を示せないのだろうか。

私も六〇歳を過ぎ、病院に通う機会が多くなって来た。先日も指定医療機関になっていただきたいと、東友会（東京都原爆被害者団体協議会）の文書持参で、お願いした医院の窓口では、非常に冷ややかに断られた。また、ある整骨院で、治療費請求の書類記入についても断られた。国家の誠意のない態度が、すべて災いしているのだろう。

今回、本当に初めて、五〇年も昔の事を文字にした。ペンを取るまでは、果たして当日の情況が思い出せるか不安だったが、じっと落ち着いて想い出すと、あの日の事は、鮮明に記憶にあった。三七回忌までは、「長崎」「原子爆弾」という文字にさえ目を伏せ、心して避けて来たものだった。

しかし、体験した者が、自分の感情で口をつぐんでしまったならば、犠牲になられた方々の無念さは、償えないのだ。このような機会にこそ、記すべきだと、思い立ったわけである。

法事の席で見せた母の元気な笑顔が、いつまでも続くように。また、平和な日々が長く続くようにと心から念じる昨今である。